

秋建時報

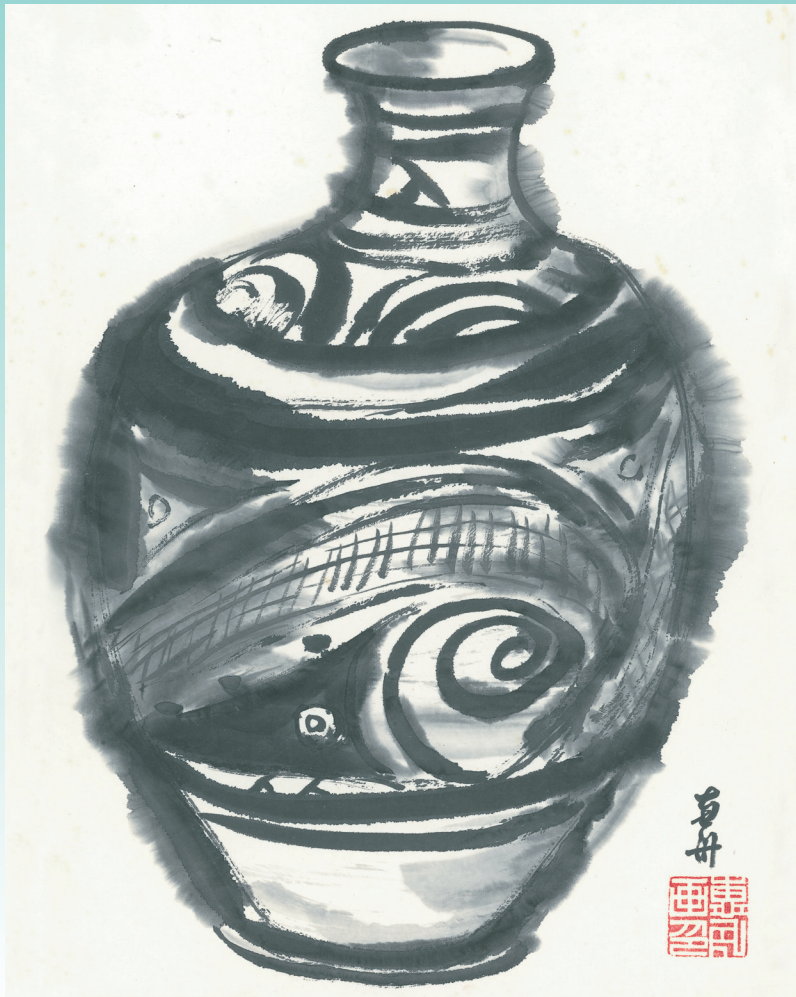
秋建時報

平成20年10月1日(第1174号)



発行／(社)秋田県建設業協会
秋田市山王四丁目3番10号
TEL 018(823)5495
FAX 018(865)2306

<http://www.a-kenkyo.or.jp>



はたちの頃の秋祭りの宴に、ふと目に留まって買った小さな安い壺。五十数年過ぎた今、思い出をたくさん詰めて、大きく大きく膨らませてみた。

「壺」 絵・文：白澤 患舟

全員集合せよ!

会長 菅原 三朗

「全員集合せよ」これは私共、秋田県立秋田高等学校昭和25年卒、同期会の毎年開催される例会案内の、タイトルである。

昭和6年生まれ私共は、昭和19年旧制秋田県立秋田中学校に入学し、昭和25年秋田県立秋田高等学校卒業という、6年間同期で過ごした。今の中高一貫校と同じである。

今年で第32回を迎えた同期会は昭和51年、当時秋田市中通で「(株)角繁」の経営者であった故渡辺繁雄さんが、会社の事務所の一角に「同期会事務局」を提供され、これに同級生の小林良弘さんと田中孝一さんの2人が事務局として、献身的な世話活動をしてくれて、現在まで32年間一回も休むことなく毎年同期会が続いている。

例会は9月の第3土曜日午後5時

30分からと決まっている。小学校でも高校でも卒業後、毎年休むことなく32年間も同期会が継続開催されているということは全く希有としか言いようがない。

今年度「第32回同期会案内文」である。一還らぬ旅に、旅立つ人多し。一逝く雲、流れる水を見れば、無常のあきらめもつく。人生は、自然な生命の流れ、いたづらな抵抗も悲しみも、必要なしだ。一長寿がいいのではない。いかに生きたかの問題なのだ。一残り時間は正確に迫る。とすれば、人おのずからの心がけが必要となろう。一何よりも感謝の心だ。妻に家族に友人に、そしてまわりのすべてに。一我々同期一同、いい人生を歩んで来たのだから「いい人生だった、倅せだったありがとう」そう言って逝けるような健康寿命を求めよう。一9月20日、また青春が甦る。人生、毎日がスタートだ。改めて告ぐ「全員集合せよ!」

当日は大町ビル六階「千秋の間」で開催、参加者は会員五十六名、恩師、

来賓等63名であった。定刻5時30分開催宣言。

慣例により、秋田高校校歌斉唱、同期会歌を合唱後、物故者に黙祷を捧げ冥福を祈願した。出席者点呼、集合写真撮影の後、代表幹事の渡部誠一郎さんがあいさつ。

今年も又、定例日に皆さんと会えることを最上の喜びとする。戦乱の中で生まれたにも拘わらず、きわどいところで生命を奪われることもなく、こうして生き長らえてきたきわめて希有な世代だと言えよう。このままでできれば80歳までは生きてみたい。皆さんの一層の精進を期待します。

又今年満96歳になった恩師寺田光和先生は、皆さんと一緒にいるとどっちが先生か似たり寄ったりだ。これからは山の厳しい上り坂、どうか寝たきりでなく元気な姿で生きてもらいたい。

乾杯は、県外から参加した4人が壇上へ進み、代表から「みんな健康で男の平均年齢までは生きよう!」と乾杯した。

秋田県

工事30件の施工者に荣誉 第29回秋田県 優良工事表彰

第29回秋田県優良工事表彰式が9月9日、秋田キャッスルホテルで行われた。

式の冒頭、西村副知事が「今回受賞された30件は、いずれも高度な技術と綿密な施工管理のもとに完成された他の模範となるもので、今後の一層の活躍を期待する」とあいさつし、平成19年度に完成した県発注工事のうち、対象となる1,600件余りの中から技術力や施工管理などが特に優れた30件を表彰した。



※受賞者一覧をHP版に掲載しております。

フォーラム

『命の道』早期整備と財源確保を求める 第10回日沿道建設促進フォーラム

9月3日、(社)東北経済連合会(幕田圭一会長)をはじめとした東北6県・新潟県の経済団体の主催による「第10回日本海沿岸東北自動車道建設促進フォーラム」が秋田キャッスルホテルにて開催され、経済団体・自治体から約500名が参加した。

冒頭、主催を代表して幕田会長が挨拶。企業誘致のために物流効率化を見据えた高速道路ネットワーク整備が必要と述べ、「緊急医療体制の強化にも貢献する。高速道路は東北地域にとって『真に必要な道路』。予算を優先的に投入し整備を図ってもらう必要がある」と訴えた。

続いて挨拶した寺田典城秋田県知事は、高速道路のネットワーク化が社会発展に繋がるとした上で、そのための財源確保と東北の面積の広さからくるハンディキャップを埋めていく必要があると述べた。

技士会

会員技術者33名を表彰 優良工事従事技術者表彰

秋田県土木施工管理技士会(北林一成会長)は、9月9日、技士会表彰規定により、優良工事に従事した会員の技術者(現場代理人)33名を表彰した。

はじめに北林会長が「建設業界は国や地方の財政難の影響を受け、事業の減少が続く、過当競争の中で多くの問題を抱えております。その鍵を握るとされた品確法が施行され3年が経過し、各発注者において総合評価方式による発注が次第に浸透してきており、これまで以上に技術者の技術力が問われる時代となってまいりました。この度、表彰を受けられた皆様は、高度な技術力を評価され、優良工事に導いた他の模範とするにふさわしい技術者であります。受賞者の皆様は、その技術力を一層磨き上げ、後進の指導・育成に、積極的に取り組んでいただきたい」とあいさつ。

式では技術者(現場代理人)に表彰状と記念品が授与された。



県協会

平成20年度新規学卒 入職者研修会(後期)

秋田県建設業協会は9月4、5日の2日間、秋田ビューホテルで平成20年度新規学卒入職者研修会(後期日程)を実施。今年度、全県から会員企業に採用された新入社員10名が参加した。

冒頭、堀江敏明専務理事が挨拶。10年前と比較して新規採用者の数が激減していることや、地方の建設業が苦況であることを踏まえながらも、「皆さんには若さという特権がある。いろいろな資格を取得し、秋田の基幹産業である建設業界を盛り上げていってもらいたい」と参加者を激励した。

研修初日は日本コンサルタントグループの加藤浩之氏を講師に迎えオリエンテーションを実施。社会人としての職場・対応マナーやコミュニケーション等基本動作の反復訓練やグループでの問題解決演習を行った。

また、翌日は電子申請センター秋田リーダーの渡邊伸也氏を講師にCALIS/EC対応パソコン実習を行い、ネットワーク利用、ファイル管理、電子納品の注意点等を学習した。



情報コラム Vol.23

県発注工事における低入札対策を強化 10月1日以降発注工事に適用

秋田県ではこのたび発注工事における入札・契約制度を改正し、低入札対策の更なる強化、総合評価落札方式の見直しについて秋田県ホームページにて公表、9月25日から29日にかけて県内で説明会を開催しました。

以下に主な改正の一部内容を記載します。

※当該資料へのリンクを本会ホームページに掲載しております。

■低入札対策の強化

- ①最低制限価格の引き上げ
- ②低入札価格調査基準価格の引き上げ及び失格判断基準の強化
- ③変動基準の試行導入
- ④低入札工事における適正な下請発注の推進

《最低制限価格の引き上げ及び変動基準の試行導入》

【現行】

純工事費+現場管理費×2/5

(ただし、入札比較価格の8.5/10~2/3を上限・下限とする)



【改正】

①純工事費×90%+現場管理費×80%+一般管理費×50%・・・(A)

(ただし、入札比較価格の8.5/10~2/3を上限・下限とする)

②最低制限価格を変動させる変動基準を試行的に導入
(A)×補正係数(※)・・・(A')

※補正係数：工事毎の特性に基づき一定範囲内で決定。

試行対象工事：各地域振興局が発注する一般土木工事及びほ装工事

(低入札価格調査基準価格、失格判断基準価格(2)においても同様)

■総合評価落札方式の見直しについて

(1)評価方法の簡便化

現行「簡易型(実績確認タイプ)」をベースに、技術的な工夫の余地の小さい一般的な工事を対象に、「特別簡易型」を創設。

(2)評価事務の効率化・合理化

「簡易型(実績確認タイプ)」及び「特別簡易型」について

①総合評価の実績確認項目に係る入札者の自己評価申請方式の導入

②入札参加資格の確認及び評価点・技術資料の審査を、全入札者に対する開札日前の「事前審査方式」から、自己評価申請に基づく総合評価点の最も高い者に対する開札日後の「事後審査方式」に改正(条件付き一般競争入札(価格競争)と同様の手続きとする)

土木建築の

近代化遺産

No.73

豊川油田(産業遺産群)

潟上市昭和槻木地区



縄文時代から天然アスファルトの産地として知られる潟上市昭和の豊川槻木地区は大正年間に日本有数の大油田を誇った所である。平成十九年には経済産業省の「近代化産業遺産群」に登録されている。明治以降の油田開発は、新政府によるアメリカ人ベンジャミン・ライマンへの地質調査を依頼したことに端を発するが、その頃、新潟県や秋田県の石油事業は掘削や精製の機械化など新たな掘削法が採用され、その生産量も大正期にピークを迎えていた。

豊川油田関連遺産群としては、古来利用された天然アスファルト採掘跡や採油井、ナショナル式ポンピングパウユニット、天然ガスを供給するコンプレッサー、事務所建物などがあつて常時公開されている。江戸時代後期の寛政二年(一七九〇)に黒沢利八という人によって土瀝青(土油・アスファルト)から灯火用の油を精製したあと、槻木真形尻の油煙山で油煙墨の製造に専念したという。

明治四五年(一九一三)中外アスファルト(株)が株山で綱式一号井の掘削を開始。大正二年(一九一三)、深度四一三mで出油を確認された後、本格的に豊川油田の開発が始まった。その後、次々に油井を増やし、大正一〇年(一九二二)頃には年産八万七〇〇〇キロリットルの最高産油量を記録している。

昭和一七年(一九四二)国策会社帝国石油に経営が移されたが産油量は次第に減少し、同四一年(一九六六)になって豊川油田で産出する天然ガスを秋田市営ガス(株)に販売を開始し現在に至っている。

現在も株山に東北石油事務所が当時の面影を残したまま建っており、周辺に採油時の櫓やポンピングパウユニット(豊川3PP)やガス供給の古いコンプレッサー(日立製)などを見学することができる。

(取材・構成/藤原優太郎)

秋田三題嘯 一杉・米・魚一

あゆかわのぼる (エッセイスト)

杉、米、魚。そのいずれも、私は素人。

一方で、『くされまたぐら』を自認。

またの渾名を『悪食』、あるいは『ダボハゼ』とも。

何でも、嵌ってみたいし、食らいついてみる。

例えば秋田杉。

正しかったかどうかいまだに釈然としないが、『水と緑の森作り税』を作る時、結果的には荷担した。

私は最後まで、その税が、秋田の山と里を豊にする効果があるとは思わなかった。山を荒らし里を寂れさせたのは、40年くらい前の国の誤った政策の『拡大造林』でも分かるように、“民”ではなくて“官”なのだから。

秋田杉だって、その価値を下げたのも外材を入れたのも官。失地回復に手をこまねているのも官。その責任を民に押しつけ、金を出せ、尻拭いをしろ、と言われても戸惑うばかり。

私は委員会で、「出口論、川下論をしよう」と言い続けた。秋田杉の活用について、行政と業界を先頭に、県民一体となって、あるいは全国民から知恵を借りて可能性を探ろう。そこから瑞々しい緑の山、豊かな里作りが見えてくる、行政はそのためにもっと頭を使う事が先決だ、と言い続けたが、県は「とにかく新税を」と逸った。

先日TVを視ていたら、青森県で、杉の間伐材からバイオエネルギーを作る技術を開発した、という報道をしていた。全国放送だ。

青森県は、日本3大美林のヒバの県で、健康飲料を作る研究や、美味い大根作りの堆肥、石鹸、シャンプーなどの商品化に成功している、と本で読んだ事がある。ヒバの県だからそれは当然だが、杉の間伐材の、先端的な有効利用が研究され成果を出す。

その3大美林、杉を抱える我が県で、全国に知らせるようなそんなニュースは聞かない。造園業者が、杉の間伐材で作った焼き杭を、安くてものがいいから県外から買うという話はよく聞かぬが。

一方で、秋田杉で家を建てる時、建築業者と一緒に山に入り、杉を選ぶ事から始めたというのをTVで知り、その話をすると、「そんな贅沢か誰にもできるわけがない」と一蹴される。「秋田杉の家は高い」とは誰でも言える。しかし、「高いけれどもいい」と言う人は少ない。

税金は取り、やる事はおままごと、で済まされまい。

それにしても、汚染米、事故米事件は、教育的な事件だ。日本人は何と愚かだったのか。否、賢しかったのかもしれない。

今ごろ気がついて仕方がないが、私たちは、日本人としてこの世に存在して以来、「米は食うもの」、それ以外の用途など考える事なく生きてきた。

特に秋田県民は、一面、休耕田を含めて田んぼだし、それでもたりなくて、豊饒の湖・八郎潟まで潰して米を作り、日本農業21世紀の曙と囃立て、ただひたすらに飯にして食うばかり。それ以外に考えることはしなかった。

酒米があるけれど、微々たるものだろうし、山形や新潟がせつせと米菓を作って潤っているのを見向きもせぬ。官とか農協の、「飼料米を作ろう」とか、「工業用資源米を作ろう」という声も聞かぬ。民から声が上がれば、「罰当たり！」と、それを押さえた。

まさか、口に入る以外に、大量の米が使われているなど、一般国民は思いもしなかったし、その大半が外国からの輸入だった、と聞いて、びっくりするしかない。

今回の汚染、事故米大量横流し事件は、業者がそこを突いた。変な言い方だが、この単純明快さは、見事というしかない。官と輸入業者以外の誰も、その米を使って食品以外の製品を作っているなど知らなかった。人間のものである、家畜のものである、口に入れる以外の米があると、誰が思っていたろう。だから、造り酒屋も米屋も、何の抵抗もなく、安けりゃ買うのが当たり前。

官は、最初とはぼけ、追い詰められると、貸元と代貸が舞台から降りて幕を下ろそうとする。日本の米作りの根本のところ、有耶無耶のまま闇の中に隠される。

今回の事件で、食う米、飼料米、肥料も含めて工業用資源米の、少なくとも3種類の米が作れる事がはっきりした。さて、日本農業が、それに取り組むか。

魚だってそうだ。

今、秋田県の水揚げ量のトップはハタハタ。

数年前までは、ホッケ、アジ、紅ズワイガニなどが上位にひしめいていて、ハタハタは、4位か5位。それがいつの間にか、それらを押し退けてトップの座についた。

これは、ハタハタの漁獲量が増えたからではない。ホッケやアジを水揚げしなくなったせいにはすぎない。

なぜか。

官、あるいは漁業関係者が、水揚げされたホッケやアジをおじゃせなくなったせい。

これもまた、生のまま、煮て食う、焼いて食う。若干干してから、やっぱり、煮て食うか、焼いて食う。水揚げトップだから、その程度では消化しきれない。養殖魚の餌にしても、高が突かれ、再び海に持って行って捨てる。それを繰り返してきた。加工して、付加価値を高めた商品にするとか、魚肥にするなど、考えもしない。

私が再三再四、本格的な加工化の研究に取り組むべし、と書いたり喋ったりすると、「素人が余計な口を挟むから、やりにくくてしょうがない」と、官が陰で言っているという声が聞こえる。そしてやがて、ホッケやアジが水揚げされなくなった。

ハタハタだって同じ事。煮て食う、焼いて食う。若干飯寿司にして売る。

昔は、獲れるだけ獲って、食いきれないものはそのまま、浜辺に積み上げて捨てる。腐った汁が海に流れて磯を汚し、藻を減らす。藻がなければ子供を生みにくるハタハタにとって用はないからこない。そういう無知の積み重ねが、ハタハタ絶滅寸前の原因の一つだった、と古老の漁師から聞いた事がある。ここにも、官の無策が見え、それは、今も変わらず。

藩政時代、佐竹氏が魚肥として他藩に移出したという記録があるらしいが、そこからなにも学んでいない。

賢者は歴史に学ぶ、というが、さて。

私はかつて、国内外のハタハタを秋田に集め、秋田ブランドのハタハタ商品をいろいろ開発して、大々的に市場展開すべし、とも言った事がある。ハタハタの漁獲量は、秋田県が4位か5位なのだから。でも、これだけは、やらなくてよかったね。もしやっていたら、今ごろ、産地偽装とか、偽ブランドで大騒動だったかもしれない。

それにしても、日本は、間違いなく豊葦原瑞穂国。

そして、人々はいまだに農耕民族。

秋田は、その典型だねえ。